

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 2 8 号

2021 年 4 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://agape.wig.jp/encounter/>

佐生健光『キリスト教と称名』より (13)

ペテロの説教

そして、流れは次の使徒行伝の時代に移っていく。

イエスが十字架の上で死に、人々の罪を贖われ、復活し昇天された後のこと。弟子たちが集まっていた時、突然、聖霊の降臨があった。その時、ペテロが立ち上がって「ヨエルが預言したことが今、実現した」と語り、ヨエル書 3・1-5 の部分を唱えた。内容は同じであるが、言い回し方に多少の違いがあるので、大事なところだけをもう一度転記してみよう。

.....

主の偉大な輝かしい日が来る前に、

太陽は暗くなり、

月は血のように赤くなる。

主の御名を呼び求めるものは皆、救われる。(使徒言行録 2・20, 21)

ペテロの説教を聞いた者たちは、その後で一斉に主の御名を呼び求めたであ

ろうと、想像する。この、単純明快な一句が、キリスト教に於ける称名の初めとなり、終わりとなった。ここには、「律法の行い」という字はもちろん、「信仰」という文字もどこにもない。キリスト教は、「称名」に始まり、「称名」に終わると言っても過言ではないのである。

ステファノの殉教とパウロの回心

使徒言行録をさらに読み進むことにしよう。この書の7章は、最初の殉教者と言われるステファノの記事で埋められている。その時、サウロもこれに立合い、彼の殺害に賛成していた、とある。サウロは、この頃、熱心なユダヤ教徒であり、後年、その時のことを回顧して、次のように言っている。

私は生まれて8日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非の打ちどころのない者でした。(フィリピの信徒への手紙3・5-6)

ステファノの殉教の日、エルサレム教会は大迫害を受け、信徒たちは地方に散っていった。サウロは、信徒の家に押し入り、男女を問わず引き出して牢に送っていた。彼が遠く信徒を追ってダマスコに足を伸ばし、町の近くに至った時、天から、光と共にイエスの姿が現れ、彼は血に倒された。彼がイエスの御言葉を聞き、御言葉に従って町に入ろうとしたが、目が見えなくなってしまったので、同行の人に手を引かれてダマスコの町に入った。彼はそこでアナニヤという信徒にあった。アナニヤが、サウロの上に手を置き、主イエスが自分をお遣わしになったことを告げた時、彼の目からうろこのようなものが落ちた。この時、彼は一転してキリスト教徒となり、後に使徒パウロと呼ばれるようになった。

パウロの回心（2）

この記事は使徒言行録には、9章、22章、26章と、合わせて3回記されている。そのうち、22章では、このことを彼自身の口で述べているが、ここでアナニヤの言ったことを紹介している。

「……今、何をためらっているのです。立ち上がりなさい。その方の名を唱え、洗礼を受けて罪を洗い清めなさい。」（使徒言行録 22・16）

サウロは直ちにアナニヤの勧めに従ったであろう。我々は、パウロの出発点に於いて、まず彼の口から「主イエスの御名が称えられたこと」に注目したい。

キリスト教の伝播と共に、称名は広く、深く流布されていったのである。この頃、イスラエルを中心として、キリスト信徒が集まって住んでいたところでは、既に「称名」が実行されていたと思われる。

サウロは数日の間、ダマスコの弟子たちと一緒にいて、すぐあちこちの会堂で、「この人こそ神の子である」と、イエスのことを宣べ伝えた。これを聞いた人々は皆、非常に驚いて言った。「あれはエルサレムでこの名を呼び求める者たちを滅ぼしていた男ではないか。……」（使徒言行録 9・21）

神が初めに心を配られ、異邦人の中からご自分の名を信じる民を選び出そうとなさった次第については、シメオンが話してくれました。……

それは人々の内の残ったものや、私の名で呼ばれる異邦人が皆、主を求めるようになるためだ。（使徒言行録 15・14－17）

ロマ書、コリント前書、テモテ書

このようにキリストの名がまだ称えられていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に務めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないためです。(ローマの信徒への手紙 15・20)

神の御心によって召されたキリスト・イエスの使徒となったパウロと、兄弟ソステネから。コリントにある教会へ、すなわち、至るところでわたしたちの主イエス・キリストの名前を呼び求めているすべての人と共に、キリスト・イエスによって聖なる者とされた人々、召されて聖なる者とされた人々へ。イエス・キリストは、この人たちとわたしの主であります。(コリントの信徒への手紙 1・2)

しかし、神が据えられた堅固な基礎は揺るぎません。そこには、「主は御自分の者たちを知っておられる」と、また「主の名を呼ぶものは皆、不義から身を引くべきである」と刻まれています。……

若いころの情欲から遠ざかり、清い心で主を呼び求める人々と共に、正義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。(テモテへの手紙 2・19, 22)

ロマ書 10 章 9-13 節

使徒パウロの「ローマの信徒への手紙」はローマにいる「主の名を呼ぶ者たち」に書かれた訳である。この手紙は、パウロが第3回伝道旅行を終えて、コリントを出発しエルサレムに上がる前に書かれたものとされる。彼は、エルサレムに上った後でローマに行く計画を立てていたが、そのために予めローマにいる信徒達に宛てて書かれたものといわれている。従ってこの書簡はパウロ晩年のものであり、彼のキリスト教のエキスであり、聖書の中でも中心的な書であるといわれる。以下に記す部分は、「称名」による救いについて、パウロが明確に述べている貴重な文章である。

9 口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。

10 実に、人は心で信じて義とされ、口に公に言い表して救われるのです。

11 聖書にも、「主を信じるものは、だれも失望することがない」と書いてあります。

12 ユダヤ人とギリシャ人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。

13 「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」のです。(ローマの信徒への手紙 10・9-13)

「称名」のみで救われる

パウロは、9 節で救われるために二つの方法を述べる。一つは、イエスが自分の主であると口に言い表すこと。もう一つはイエスの復活を心のうちに信じることである。10 節でこれを繰り返す、確認する。しかし、13 節では、「主を呼び求める者はだれでも救われる」と、「称名」一本にしぼり、13 節で、ヨエルの預言と聖霊降臨の際ペテロが説いた説教と同じ文言で締めくくる。

称名という流れと、信仰という二つの流れが合流して一つとなった。しかし主流は「称名」であり、信仰はその中にのみこまれていったのである。だから、12 節、13 節では、「信仰」という文字がなくなった。称名するということは、そこに信仰も含まれることになる。我々は、「称名」のみで救われるのである。

パウロはまた、次のように言う。

ここであなた方に言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも、「イエスは主である」とは言えないのです。(コリント 12・3)

我々が称名できるのは、聖霊による、ということである。我々は、自分の力で称名し、称名を呪文のように働かせて主の御名を称えるのではない。聖霊の働きによって、我々が称えさせられるのである。だから、我々が主の御名を称えることができるということは、それを意識するしないに拘らず、我々に聖霊の力が働いているということの意味する。

まとめ

旧約聖書の時代からの「称名」の流れは止まることなく、新約聖書の時代にも流れていく。但し、称える御名はエホバの神からイエスに転換した。律法の行いにより義とされる古き時代は過ぎ去り、イエスの贖いにより義とせられる新しき時代が到来した。

ここに、「主の御名を称える」ということは、同時に「主の贖いによって義とせられる」という信仰を含むことになり、その意味に於いて、「称名」のみによって救われると言い得るのである。

また、「称名」は、聖霊の働きによるのであり、そうでなければ我々は、主の御名を称えることはできないのである。

称名について考える(1) ローマ人への手紙

以上述べてきたように、旧約聖書、新約聖書の時代を通して、連綿として主の御名が称えられてきた。それらを再考して、少しなりとも「称名」の本質を掘り下げてみたい。

先ず、ローマの信徒への手紙を再考することから始めよう。

10章、11章はイスラエル民族の救済論であり、その大意は、律法の行ないを追い求めたイスラエル民族は遂に神の義に達することが出来ず、信仰による義を求めた異邦人がその義に到達する。しかし、イスラエル民族も、神の哀れみにより異邦人の後から、救いに達するということである。10章冒頭でパウロは、イスラエル民族が救われることを熱烈に願い、神に祈る。そして、信仰による義を説く。

モーセは、律法による義について、「掟を守る人は掟によって生きる」と記しています。しかし、信仰による義については、こう述べられています。

「心の中で『誰が天に上るか』と言ってはならない。」これは、キリストを引き下ろすことにほかなりません。また、「誰がそこの淵に下るか」といってもならない」これは、キリストを死者の中から引き上げることとなります。では、なんとされているのだろうか。「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある。」これは、私たちが延べ伝えている信仰の言葉なのです。 (ローマの信徒への手紙 10・5-8)

称名について考える(2) 信仰の言葉

信仰の言葉とは、あなたが称えている「主イエスの御名」であり、あなたが信じている「贖い主イエス・キリストの復活」である。それは、あなたの口、あなたの心というあなたのすぐ近くにあるのではないか、とパウロは説く。この言葉は、申命記からの引用であるが、それはエホバがモアブの地で、モーセをしてイスラエルの民に言わしめた言葉の一部である。

わたしが今日あなたに命じるこの戒めは、難しすぎるものでも無く、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取ってきて聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。海のかなたにあるものでもないから、「誰かが海のかなたに渡り、私たちのためにそれを取ってきて聞かせてくれれば、それを行うことができるのだが」と言うには及ばない。御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる。(申命記 30・11-14)

称名について考える(3) 律法の時代

エホバは律法の書に記された誠命を守るべきことを命じたが、この言葉とともに、それは民が理解できなく実行できない程難しいものでないと、言っておられる。パウロが申命記のこの言葉を引用した理由は、これから述べることは、誰でもできるやさしいものであることを力説したいがためであったであろう。8節で述べた口と心にあるものを、次に具体的に述べる。一つは称名、一つは信である。……

旧約聖書の時代、モーセ以前には称名一本であったが、モーセ以後には律法という流れが生じ、二つの流れは合流することなく併存していった。それは何故か。初めの流れは、誰でも実行できるやさしいものであるが、律法は庶民にとって実行することは困難であった。だから、それは選ばれた人の道となった。為政者、宗教の専門職、学者パリサイ人達であり、残された庶民は従来の「称名」の道を進み、ここに流れは2本となったのである。律法はエホバの神から与えられた神聖なものであり、それを奉ずる者は大きな誇りを持ち、律法の行いの実行者として義人を自負し、律法を行なえない者を下に見て、彼らを罪人と蔑視した。

彼らは、自分は律法の行いによって義とされたと思い込んでいたので、「称名」の必要は感じなかった。だから、主の御名を称えることもなくなっていた。

称名について考える(4) 一方、庶民は

一方、庶民は自分たちは罪びとであるという自覚を持たされ、罪の赦しを願って主に呼ばわった。

このような状況は、イエスがご存命の時代に頂点に達した。それは福音書に見ることができる。学者パリサイ人は、律法の行いを実行すべく、全力を尽くした人たちである。彼らはそれを完全に実行し得たと思った。にも拘らず、彼らはイエスに、「白く塗った墓、盲を手引きする盲、人の目の塵には気づくが自分の目にある梁が分からない者、人からは尊敬されるが神からは憎まれるもの」と言われた。彼らは外側では掟を守れたが、内側では守ることができなかったのである。パリサイ人であったころを顧みて、自分は落ち度のないものであったと言ったパウロでさえ、信徒になってから「ああ悩める者よ、この死のからだから救ってくれるのは誰か」と叫んだ経緯を見れば、それはよく分かることである。にもかかわらず、自分は義人であり、見える者と自負したところに彼らの過ちがあった。

イエスは言われた。「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。

しかし、今、『見える』とあなたたちは言っている。だから、あなたたちの罪は残る。」(ヨハネによる福音書 9・41)

称名について考える(5) 異邦人へ浸透

一方庶民は、イエスに「飼う者のない羊」と嘆かれたほど、惨めな状態であった。彼らは貧しく、病人、身障者であり、自分の罪を自覚した人たちであった。彼らは主の名を呼び求めたのであった。主はお応えになった。

「貧しい人々は幸いである、

神の国はあなたがたのものである。」(ルカによる福音書 6・20)

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」(マルコによる福音書 2・17)

庶民の間では、主の御名を称えることは、日常のことであったと想像する。イエス復活の後に、称えていた主の御名が、実は贖い主イエスであったこと知り、「我が主イエスよ」と称え始めるようになったが、その「称名」が各地のキリスト信徒の間に浸透するのに、それほどの時間は必要としなかった。…コリントの信徒への手紙が書かれたのがイエス復活後 27 年後の A.D. 57 年と言われているが、パウロは、その手紙の冒頭の挨拶でコリントの信徒たちに「至る所で私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人々とともに、……」と述べている。称名する人々は、至る所にいたことになる。それはまた、異邦人の間にも着々と浸透していったのである。